

注目されている温熱治療が なぜがんにも効果があるのか！

がん細胞は熱に弱い

72年の歴史を誇る藤木病院。33年前に医療法人財団恵仁会を設立。この間、8つの外来診療科を持ち365日体制の緊急外来や動脈硬化外来を備え、老人保健施設、軽費老人ホームなどの医療・福祉施設運営などで地域社会から絶大な信頼を得ている富山県内の名門病院だ。

がん治療分野においては、標準化学療法に加えて遺伝子治療や北陸唯一の電磁波温熱療法機器による温熱療法など、複数の治療法を併用し高い治療効果を上げていることでも知られている。

しかし、温熱療法に関しては、なかなかピンとこない人が多いようだ。藤木先生は常々そのことを案じ、「だれにでも分かりやすい説明をしたい」との思いで、昨年、病院内の研修室で「がん治療における温熱療法の役割と働き」というテーマ

で院長講演会を開催している。

当日はあいにく天候が悪いにもかかわらずがん治療に対する関心の高さのあらわれか、多くの方々が参加。参加者はかみ砕いたわかりやすい説明に頷き、講演終了後には活発な質問が出たという。

温熱療法とは、簡単に言えば、がん細胞は正常細胞に比べて熱に弱いという性質つまり悪性腫瘍が43度以上に加熱すると致死効果が出るという性質を利用した理屈に叶ったがんの治療法である。

期待できる多くの効果

恵仁会のがん治療の特徴は、低用量化学療法と高周波ハイパーサーミア装置温熱と高気圧酸素療法を併用するという独特のものだ。

ちなみにこの温熱療法は「第4番目のがん治療法」と言われるもので、脳・眼球を除くすべての部位に

適用することができる。また初期、末期やがん組織型などの種類を問わず効果があるといわれる。

温熱治療は、直接がんを殺す効果に加え、抗がん剤に対する感受性を高めるために、抗がん剤の投与量を減らすことや薬剤効果向上や副作用軽減なども期待でき、二次発がんの危険性もない。

ちなみに同病院の高周波ハイパーサーミア装置は、世界で初めての導入だ。



藤木病院
ふじきりゅうすけ
院長 藤木 龍輔



「食」のコラム

（第3話）

目の疲れには、クコの実を♪

今回は、杏仁豆腐の上ののっている赤い実でお馴染みの「クコの実」をご紹介します。

飾りのようにひっそりとのっているクコの実ですが、実は薬膳料理では重宝されているスーパーフードです。100種類以上のビタミン、ミネラル、ビタミンCはなんとオレンジの約100倍含有。細胞の老化を防ぐと言われているポリフェノールやカ

ロテノイド類が豊富で、抗酸化作用の高い食品と言えます。ちなみに、健康オタクだった徳川家康も愛食していたそうです。漢方的には腎を補い、「飲む目薬」とも呼ばれ、目の疲れや眼精疲労からくる頭痛も和らげてくれます。血圧を下げる効果があるので低血圧の人は食べ過ぎに注意です。1日に食べる量は5粒～20粒程度。日本家庭の食卓にはまだまだ馴染みのないクコの実。簡単レシピで日々の元気に取り入れてみましょう。

■ クコの実のリンゴ酢つけ

（材料）
クコの実 15g
はちみつ 大さじ1
りんご酢 50cc



- ① クコの実をお湯で洗う
 - ② クコの実に、はちみつとリンゴ酢を加え、1日浸す。
- ※そのまま頂いてもよいですが、お水やお湯、炭酸水で割って頂いても美味しいです。